

(論文内容の要旨)

本論文は、批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知に関して実験的に検討したものである。6章、9つの研究から構成されている。

第1章は「序論」である。批判的思考の概念を整理し、批判的思考の認知プロセスを検討する意義について論じている。第1節では、批判的思考の概念を整理し、歴史的背景を概観している。第2節では、批判的思考プロセスを認知心理学的観点から検討する意義について論じている。第3節と第4節では、本論文全体の構成と目的を述べている。

第2章「批判的思考研究の動向」では、主要な批判的思考モデルの特徴を概観し、従来の批判的思考モデルの問題点を指摘している。第1節ではEnnis, Facione, Paul, Brookfieldの4つの主要な批判的思考モデルの特徴を概観している。第2節では、まず主要な批判的思考モデルの問題点を検討し、批判的思考の個人内変動に着目することの意義について主張している。そして、Zechmeister and Johnson, Kuhn, Halpernの3つのモデルを概観しながら、批判的思考が目標志向的に用いることが仮定されていること、および、そのプロセスにおいてメタ認知が重要な役割を果たすことを示し、批判的思考の個人内変動の根底にメタ認知の働きがあるという仮説を提示している。第3節では、これまでの批判的思考のモデルは批判的思考におけるメタ認知の役割が想定されてきたものの、実証研究にもとづいた批判的思考プロセスのモデルは提唱されていないことを述べている。

第3章「批判的思考パフォーマンスにおける個人内変動」では、批判的思考のパフォーマンスレベルにおける個人内変動に影響を及ぼす諸要因について検討している。第1節(研究1)では、情報ソースの信憑性の高さが批判的思考を抑制する傾向があるものの、その影響は外的要求の程度や論法によって異なることを示している。第2節(研究2)では、省略三段論法の受け入れ度の評定を求める実験をおこない、提示されていない大前提への信念の強さが省略三段論法の評価に影響を及ぼすことを明らかにしている。第3節(研究3)では、省略三段論法に対する暗黙の前提への信念の影響は、暗黙の前提の補いやすさが異なったためであること、第4節(研究4)では、それは順序効果によるものではないことを示している。第5節では、批判的思考パフォーマンスの個人内変動に、論法のタイプ、批判の外的要求、情報ソースの信憑性、および暗黙の前提への信念が影響を及ぼすことを論じている。

第4章「批判的思考のメタ認知的判断における個人内変動」では、批判的思考のメタ認知レベルにおける個人内変動に影響を及ぼす諸要因について検討し

ている。第1節では、批判的思考プロセスにおいてメタ認知が果たす役割に関して、メタ認知的知識およびメタ認知的コントロールの観点から検討する意義について論じている。さらに、第2節（研究4）では、批判的思考の使用に関するメタ認知的知識として、批判的思考の「効果的」文脈と「非効果的」文脈を収集し分類を行い、第3節（研究5）では、批判的思考の使用判断における目標と文脈の影響を示している。第4節（研究6）では、批判的思考の表出判断における目標と文脈の影響を明らかにしている。第5節では、大学生は日常経験にもとづいて批判的思考の使用に関するメタ認知的知識をもち、目標や文脈といった状況要因を考慮しながら批判的思考の使用-表出判断を行っていることを論じている。

第5章「批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知」では、第3章で示した批判的思考パフォーマンスの個人内変動と第4章で示した批判的思考のメタ認知的判断の個人内変動の関係を検討し、以上の実証研究から導かれるモデルを提示している。第1節（研究9）では、メタ認知的判断が批判的思考の実行プロセスに及ぼす影響を明らかにしている。第2節では、研究1～9で明らかになった批判的思考の個人内変動の特徴をもとに、批判的思考の使用判断から表出に至る「批判的思考個人内変動の認知プロセスモデル」を提示し、目標志向性とメタ認知の役割について検討している。第3節では、メタ認知的判断が批判的思考の実行プロセスに影響を及ぼすこと、批判的思考は使用判断、実行、表出判断という3つのプロセスに分かれること、また、いずれのプロセスにおいてもメタ認知が重要な役割を果たすと主張している。

第6章「結論」では、第1節で、第3章から第5章までの全体的な考察を行い、第2節では、本研究の意義について、批判的思考研究および批判的思考教育の観点から論じている。第3節では、今後の批判的思考研究の展望として、本研究で明らかになった批判的思考の個人内変動が課題や文化を越えて一般化できる認知プロセスであるかを検討する必要性を論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知に関して、使用判断、実行、表出判断のプロセスに分けて、実験的に解明したものである。工夫されたオリジナルな材料と実験パラダイムを用いた9つの実験を行い、さらに、「批判的思考個人内変動の認知プロセスモデル」を提案し、批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知の役割を統合的に検討した論文である。

その論文の特色は以下の3点である。

- (a) 従来十分に解明されていなかった批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知の役割を、巧みな実験によって多面的に検討している点
- (b) 批判的思考の個人内変動を説明するために、新たな「批判的思考個人内変動の認知プロセスモデル」を提案している点
- (c) 思考、推論、メタ認知などの広範な教育認知心理学研究への示唆、および批判的思考教育における応用可能性を持つ点

第1章では、批判的思考の定義、意義、従来の研究を整理している。さらに、従来の批判的思考研究の問題点として、目標に応じて批判的思考を使い分ける問題や、目標志向的な批判的思考を支える認知的基盤について実証的に検討した研究が少ない点を挙げているところに、本論文の着眼点の鋭さが見られる。

第2章では、批判的思考の認知プロセスに関して、メタ認知の観点から、従来の研究のモデルを比較検討し、(1)実証的データをもとに構築されていないこと、(2)批判的思考の個人間ではなく個人内での変動（促進-抑制）について検討されていないことを指摘して、本研究のめざすモデルを明確化している。

第3章の研究1では、情報ソースの信憑性が異なり、複数の論理的に誤った論法を含む文章を提示して、大学生参加者が自由に感想を書くフェーズ、任意で批判を書くフェーズ、強制的に批判を書くフェーズに分けて記述を求めるという方法に工夫が見られ、情報ソースの信憑性が批判的思考を抑制するという、従来は見過ごされた点を指摘している点で重要である。さらに、研究2では、省略三段論法という統制された課題を構成して、信念や論証形式の影響を検討し、信念の影響が前提の補いやすさであることを明らかにしたことは、思考・推論研究においても重要である。

第4章の研究5,6において、批判的思考に関する文脈を自由記述で抽出し、クラスター分析を用いてメタ認知的知識を検討する方法は、ユニークな手法として評価できる。さらに、研究8の仮想的シナリオを用いてどのような発話をするのかを選択させる方法は、目標によって影響を受ける批判的思考のメタ認知的な表出判断を測定する手法を開発した点で意義は大きい。

第5章の研究9は、全体のまとめとなる実験であり、目標を考慮するメタ認知的判断プロセスが批判的思考のパフォーマンスに及ぼす効果を解明した研究として位置づけることができる。とくに、メタ認知が批判的思考を促進-抑制する両面があることを解明した点は重要な発見である。さらに、9つの実験の結果をもとに提起した「批判的思考個人内変動の認知プロセスモデル」は、この研究分野の理論的展開への大きな貢献である。

第6章において、本研究の意義を、基礎研究と教育実践研究として検討した上で、今後の展望として、5つの課題を明確化している点は、評価できる。

以上のように本論文は、批判的思考プロセスにおける目標志向性とメタ認知に関して、オリジナルな着想に基づき、新たに開発した巧みな実験手法を用いて、重要な多くの成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 批判的思考研究のみならずコンピテンスとパフォーマンス、メタ認知の構成要素、能力観、二重システムモデル、認知的コストなどについての先行研究の中での本研究の位置づけの明確化
- (b) 認知とメタ認知の境界設定と相互の機能連関、ならびに目標志向性と批判的思考態度との関係の解明
- (c) 本論文で用いられた複数の課題間の連関ならびに課題と現実場面との対応の解明
- (d) 目標の階層構造や時間的推移が批判的思考に及ぼす影響の検討

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値をいささかも損なうものではない。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年2月18日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。